

蘇偉貞『沈黙の島』に刻印された 90年代の台湾文学への 衝撃と挑戦

倉本知明訳／あるむ／2016年3月／348頁／2300円＋税



赤松美和子

現在、日本では約二〇〇冊の台湾文学作品が翻訳出版され、約二五〇名の作家や詩人が紹介されている。^①だが、なぜ紹介されていないのかという作家も少なくない。その一人が蘇偉貞だ。

蘇偉貞は、一九五四年台南生まれ、外省人二世（祖籍は広東省）の女性作家である。政治作戦学校演劇科卒業、国防部芸術工作総隊などに所属した軍中作家で、退役後は執筆活動を続けながら『聯合報』副刊などの編集も務め、一九八〇年に「紅顔已老」で聯合報中篇小説賞を受賞して以来、八六年まで様々な文学賞を七年連続受賞するなど闊秀作家として注目を集めてきた。だが、朱天心らと同じく戒嚴令解除により作風は急激に変わる。その影響は自らが育った眷村と女性の情欲の描き方にも表れ、倉本知明「愛情のユートピアから情欲と狂気のデイストピアへ——「解嚴」前後における蘇偉貞の眷村表象」に詳しい。現在は張愛玲の教壇に立つ傍ら、作家としても意欲的に作品を発表し続け台湾文壇を長年にわ

たり牽引してきた一人である。

台湾文学の日本語訳書は、九〇年代に約四〇冊、二〇〇〇年代に約一〇〇冊が刊行されている。台湾本土化が声高に叫ばれた九〇年代から二〇〇〇年代初めにおいて、台湾化を主題とせず、朱天心のように日本との関係を著すこともない蘇偉貞の長編小説は、台湾化の喧騒の中に埋もれてしまっていたのかもしれない。

『沈黙の島』⁽³⁾は、蘇偉貞にとつて一六冊目の単著であり、一九九四年の第一回時報文学百万小説賞特別審査員賞受賞作である。台湾文学における台湾化が落ち着き多元化への変容を経て、二〇一三年にシンガポールで刊行された英訳に続き、本書は、二〇一六年三月に、比較文学・台湾文学研究者で、蘇偉貞に関する研究論文の著者でもあり、訳者に最も相応しい倉本知明氏の翻訳により『沈黙の島』台湾文学セレクション3としてあるむより刊行された。

『沈黙の島』は次のように始まる。主人公「晨勉^{チエンミョウ}は、三十歳の誕生日を「もうひとりの自分」と迎えてから起こった出来

事をずっと覚えていた。その日、台北を発った晨勉は再び香港へと舞い戻つてきた」。夫殺しの罪により無期懲役となつた母は、晨勉が二五歳の時に刑務所で自殺した。重過ぎるトラウマを抱えたこじらせ女子の晨勉は、現実逃避願望のあまり、想像上の「もうひとりの晨勉」を生み出し、時に「もうひとりの晨勉」として生きる。作中には、「両親を失つた晨勉を晨勉Aとすると、晨勉Aの想像が創り出した両親健在の晨勉Bの世界も同時並行的に存在し、「晨勉Bの世界は基本的に晨勉Aの期待と願望が生み出した幻影となつている」(「訳者あとがき」三三五頁)。

ただこのA・B二つの世界は完全にパラレルではない。晨勉Aには晨安という異性愛者の妹が、晨勉Bには晨安という同性愛者の弟がいる。処女だった晨勉A・Bはそれぞれの世界で異なる複数の男性たち(異性愛・両性愛)と肉体関係を持つ。その複数の男性も、例えば、晨勉Aのドイツ人の恋人の名がグニーであるのに対し、晨勉Bの世界に出てくるダ

ニーは、祖という名のアメリカ人華僑のイングリッシュネームといった具合に、同じ名を与えられながらエスニシティやジェンダーが異なるために、訳者作成の「登場人物」相関図(三三四頁)で何度も確認しなければ、今はA・Bどちらの世界にいいのか迷子になり眩暈がするほどだ。この眩暈体験も本書に耽溺する醍醐味の一つなのである。

「台北を発つた晨勉は再び香港へ舞い戻つてきた」と始まる冒頭の一文は、晨勉Aのホームが台湾ではないことを示唆している。異性愛者の晨勉Aは、香港・離島・シンガポール・ドイツ・イギリス・パリ島と国外離散し続け、グニー(ドイツ人の異性愛者)・シン(シンガポール在住のオーストラリア人の両性愛者)・ドゥーラン(複数の妻を持つインド人の異性愛者)等複数の男性と肉体関係を持つ。時間的にも空間的にも肉体的にも常に自由に移動し続けるため、読者も晨勉Aとともに、時差・誤差・デジャヴ体験を満喫できることだろう。終焉では、晨勉Aはグニーの子どもを妊娠し、

シンと結婚する。

一方、晨勉Bのホームは台湾だ。中国に出張を繰り返す夫の馮曄がいながらも、祖／ダニー（母親の呪縛から逃れられないアメリカ人華僑）やルイ（台湾人男性）とも肉体関係を持ち、祖／ダニーの子どもを授かるが墮胎する。

この『沈黙の島』の複雑さについて、紀大偉は、左右異なる映像が見える3D映画のメガネを左右別々にのぞくからわかりにくいのであって、左右同時に見れば3D映像が浮かび上がってくると指摘している。では3Dメガネをかけたつもりで『沈黙の島』を読むと、立体的に何が浮かび上がってくるのだろうか。

こじらせ女子の晨勉は、強烈な自意識の持ち主でありながらも自己肯定感に乏しく、「あなたはまだこの人生を続けたい？」と自問を繰り返すほど生きていくことさえ不確定で、過去の陰鬱な記憶の中に閉じこもっている。けれども処女だった晨勉Aは、「僕にとつて、君は何もセックスの後、「僕にとつて、君は何も初めての相手ってわけじゃないし、それ

に初めてを君に奉げたいとも思わない。

だけど、今回は本当に生まれて初めてセックスしたような気分だったよ。しかも、それをなんて言っ方がいいのかまるでわからないんだ。僕は君の『呼吸』が好きだ。何としてでもそれを手に入れたい。これは褒めてるんだよ」（五二頁）

というダニーの情欲の語りの中で性と生を礼賛され、「ダニーは自分に欲望とは何か教えてくれたのだ。もしもこれから先も生きたいと強く願うことがあるとすれば、それはきつと他でもない、彼によつて与えられたものに違いなかった」（五二頁）とセックスというリア充を語る。晨勉Bもまた「私の場合、セックスだけが自分にリアルな感覚を与えてくれるような気がする」（一〇七頁）とセックスにより生を取り戻したようだ。以降、晨勉は、男性との性交渉を通じて自分自身を開くことが可能となり、身体的な感覚を以て自身の輪郭と存在を確かめ、今生きているという実感と「まだ人生を続けたい」という生への渴望を得る。デジャヴのように繰り返し描かれる

性交渉とその記憶は、立体的に浮かび上がる3D映像というよりも、読者である私にとつては、めくるめくる官能が身体に入り込んでくるような4D体験に近いものだった。

晨勉にとつて男性たちとの性交渉は自分を開き自分の存在を確認するきっかけではあるものの、依存したり所有されたりすることは拒否すべきことだ。それは、既婚者の晨勉Bも同様である。例えば、夫の馮曄は、祖／ダニーの子どもを妊娠した晨勉Bを責めることなく墮胎に付き合い、「君の生命の本質は何も変わっちゃいないよ。誰もそれを変えることはできないんだ」（二八四頁）と許容する。晨勉は、男性にも子どもにも法にも囚われない自立した存在なのだ。

自立し孤島であることを求めながらも一方で、晨勉は、身内の死を「アイデンティティのランドマークを失」（二二頁）うと捉え、「自分の存在を証明してくれるような関係性を失」（二四七頁）うことを最も恐れる。晨勉AもBもそれぞれ妹晨安と弟晨安を失い「生命的

な「関係性」が断ち切られてしまうが、子どもを「垂直に相連なる生命」(三一八頁)として渴望し、いかなる男性とのセックスも避妊することなく、最後にダニーの子どもを身ごもる。そして、父親を明らかにせぬまま両性愛者のシンと結婚する。

今度は、なぜ3Dメガネの視差を作り出すように技巧的な構造を以て語ろうとしたのかを考えてみたい。これは、眷村出身の軍中作家であり中華民国文壇のメインストリームを歩いてきた蘇偉貞が、九〇年代の台湾化に遭遇した衝撃と無関係ではないだろう。

本書が誕生した時代背景と蘇偉貞の来歴については、「訳者あとがき」をぜひお読みいただきたいが、中華民国という虚構の物語の孤島たる台湾の、さらに眷村という孤島で育った蘇偉貞にとつて、相対化して想像する技は、たとえ作品化したのが戒嚴令解除以降であったとしても、潜在的に獲得していた天性のものなのかもしれない。晨勉Aが台湾を戻るべきホームとせず、晨勉Bが台湾をホーム

とするパラレルな設定は、「晨勉Bの世界は基本的に晨勉Aの期待と願望が生み出した幻影となっている」というよりも、一方では離散を望みながらも無関係ではいられない「台湾」に対する複雑で引き裂かれたアイデンティティを立体視として小説の構造に表しているのではないか。晨勉Bの世界のみが願望の世界ではなく、A・Bそれぞれが完全ではない晨勉の一部であり互いの影でもあるのだ。

晨勉と性交渉する男性たちの性的指向とエスニシティの多様性も刺激的である。九〇年代の台湾文学において同性愛文学は看過できない大きな潮流の一つだ。許劍橋「九〇年代台湾女同志小説研究」によれば、同性愛小説の発表作品数は、「六〇年代…八編、七〇年代…一三編、八〇年代…一六編、九〇年代…二一五編⁶⁾」であり、九〇年代に急増している。これは、一九八九年以降、聯合報文学賞が立て続けに同性愛文学を受賞作に選んだ影響であろう。台湾化に対して、反共復国の前線基地である眷村を以て応

戦してきた蘇偉貞は、『沈黙の島』においては、「沈黙」という方法を以て受け流し、女性の身体的欲望に、同性愛文学という九〇年代の台湾文学の新たな潮流を掛け合わせて挑んだのではないだろうか。だが、異性愛者である晨勉にとつて同性愛者や両性愛者の男性たちは一貫して客体に過ぎない。性的指向の多様性が本作においてどこまで主題化されたかについては疑問が残るものの、晨勉Aが子どもを授かった後、オーストラリア人でシンガポール在住の両性愛者シンと結婚する選択は示唆に富んでいる。

『沈黙の島』は、中国も台湾も性も生も相対化し、原郷としての中国にも本土としての台湾にも如何なる地にも何人にも所有されたり依存したりすることなく、第三の地である離島で子どもと生きていくことを主人公に選ばせた。その子どもの父として選ばれたのは、中国人でも台湾人でもなくドイツ人の実の父親でもない両性愛者のシンだった。こじらせ女子たる晨勉が、第三の道を選択するに至る過程には、未知なる地や男性との接

触や交渉によりリア充と自分自身を相対化する経験が必要だったのだ。二項対立から離脱し自立した一個の人間として生きていくために、性的指向の多様性を掛け合わせて第三の選択を導き出すという開かれた挑戦に、九〇年代の台湾文壇で書き続けていく情熱と気魄は私は見えた。『沈黙の島』には、九〇年代の台湾化の高揚を全身に纏った台湾文学へ回収されることへの回避と挑戦、そしてそのような挑戦が生み出していく多元化の萌芽とが、二〇年の時を経ても冷めない熱を帯びて饒舌に刻み込まれているのだ。

注

- 〈1〉 赤松美和子「日本における台湾文学出版目録（一九五四年―二〇一五年）」（陳芳明著、下村作次郎・野間信幸・三木直大・垂水千恵・池上貞子訳『台湾新文学史』下、東方書店、二〇一五年所収）七四―九三頁参照。
- 〈2〉 『日本台湾学会報』第一三三号、二〇一一年、七七―九四頁。
- 〈3〉 国立台湾文学館「台湾文学網 蘇偉貞 作品資料」[http://dn.nml.gov.tw/dn/m2/nml_w1_m2_1_3.aspx?p=3&id=1702008&book_id=\(2016年12月29日アクセス\)](http://dn.nml.gov.tw/dn/m2/nml_w1_m2_1_3.aspx?p=3&id=1702008&book_id=(2016年12月29日アクセス))

〈4〉 審査の結果は以下の通りである。第一回目の投票では、朱天文「荒人手記」が一八票、「沈黙の島」が一二票、平路「行道天涯」が一票をそれぞれ獲得し、首賞には朱天文「荒人手記」が選出された。急遽「審査員特別賞」が増設され、決選投票により「沈黙の島」が三票（姚一葦・東年・施淑）、「行道天涯」（李喬・蔡源煌）が二票獲得し、「沈黙の島」が選ばれた。林文佩記録整理「〈一〉第一屆「時報文学百万小説獎」決審會議記実」有関〈沈黙之島〉的部分」蘇偉貞『沈黙之島』二〇〇四年（第二版七刷）、時報出版、二八七―二八八参照。

- 〈5〉 紀大偉【台湾同志文学簡史SP】紀大偉・3D、愛滋、新加坡——蘇偉貞的《沈黙之島》二〇一五年三月三日、<http://okapi.books.com.tw/article/3476>（二〇一六年二月二十五日アクセス）
- 〈6〉 許劍橋「九〇年代台湾女同志小説研究」（国立中正大学修士論文、二〇〇二年）四頁。

〈7〉 赤松美和子『台湾文学と文学キャンブ——読者と作家のインタラクティブな創造空間』（東方書店、二〇一二年）八九頁。